

国語(40分)

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

人としてしゃべっていると、同じことがらに対してこれほど見方が違うものかと驚かされることがある。なんでこんなことがわからないのかとイライラしたり、どうしてそんな見方をするのかと不可解に思ったりすることもあれば、そういう見方もあるんだと感心したりすることもある。いずれにしても、それらは他者の視点に触れる経験とすることができるだろう。

このように他者の視点に触れる経験をすることで、僕たちはその他者の視点を取り入れていく。^①これは、自己が他者を含むものへと拡張していくことを意味する。僕たちは、この世に生まれ落ちた時点で、世界に対するひとつの視点を身につけているわけではない。生後、身近に接する人たちのもつ視点を取り入れることで、世界を見る視点をもつようになっていくのだ。

人生の初期に、周囲の人たち、とくに両親のように身近にかかわる人たちの視点に触れ、そうした他者を含むものへと自己が **A** されていく。そうした身近に接する他者の視点を取り込むような形で自己物語が形成されていく。

はじめのうちは、身近な他者の視点に触れるごとにそれを取り込むというようにして、大きな揺れを見せながら自己物語が形成されていく。視野が広がるという言い方がなされることがあるが、それは新たな視点を他者から取り入れることで、ものごとをより多角的に見られるようになることをさすものである。

B、そのうちに、その内容が蓄積されてくるにつれて、自己物語は周囲の人たちにより左右されないような安定感のあるものへと仕上がっていく。こうして、僕たちの見方は、よく言えば安定し、悪く言えば固定化されていく。僕たちは、自己物語の文脈を基準に周囲の出来事を意味づけ、自分の世界を築き上げていく。

この安定化した自己物語の世界から脱しようという動きが始めるのが、人生の節目とか人生の危機とか呼ばれる時期である。

では、これまで安住してきた自己物語の世界が窮屈になったとき、居心地悪く感じられるようになってきたとき、どのようにしてそこから脱したらよいのだろうか。

自分が嫌になったとき、自分のこれまでの生き方に嫌気がさしたとき、人は自己についての新たな語り方を必要とする。

自分が嫌になるというのは、いわばこれまで生きてきた自己物語にうんざりしてきたことを意味する。そこでは、自己物語の書き換えが必要となる。環境や置かれた状況が変化するために、これまでの自己物語が通用しなくなるということもあるかもしれない。その場合も、自己物語を今の状況によりフィットしたものと書き換えていく必要がある。

では、そうした書き換えをもたらすものは何かというと、それは語り直すことだと言える。そして、語り直す、**C** これまでとは違うふうにより自己を語るということを考えたとき、手取り早いのは、語る相手を変えることだ。

自己を語る相手を変えてみれば、自分の語り口が変化していく。環境が変わったのをきっかけに、自分の性格や行動パターンが大きく変わったという話をよく聞く。それまではとても控えめで消極的だった人が、まるで別人のように **D** 的に振る舞うようになったりする。

何もかもが嫌になったとき、人はしばしば旅に出るということをする。

いつもと違う場所、人、生活習慣。そうした非日常的な環境に身を置くことで、日常的に自分を方向づけている自己物語による縛りが、しばしゆるむのを実感できる。

旅先では、日常的に接してきた相手との接触が断たれるため、これまでの自己の語り方から解放される。たまたま旅先で出会った人と **E** 投合して語り合うとき、相手はこれまでの自分を知らないのだから、これまで生きてきた自己物語の物語筋を踏まえずに、こうなりたいたいという方向により自己を語ることができる。

これまでの自分を知っている人を前にすると、どうしてもこれまで生きてきた自己物語の文脈からずれる語りはしにくい。何を語るにも、これまでの自分の生き方を基準にした語り方をしないと、相手の心の中にしっくり収まっていかない。そこをじっくり説明してわかっもらうのも面倒なので、ついついこれまでの語り口を踏襲(そのまますけつぐこと)してしまう。ゆえに、慣れ親しんだ人たちの中にいながら、生まれ変わるといふのは難しい。

何もかもが非日常的な場に身を置くことが、新たな自分の創造、つまり新たな自己物語の創造につながる。

旅に出たいという衝動に駆られるとき、人は非日常的な場面での、これまでの自分を知らない人を前にしての、新たな自己の語りのチャンスを探求しているのだ。気持ちを新たに、別の自分の語り方をしたい。④そんな思いを抱いて、人は心機一転の旅に出る。

(榎本博明『へほんとうの自分』のつくり方 自己物語の心理学』より 一部中略あり)

注1 多角的……多方面にわたるさま。多面的。

注2 フィット……ぴったりと合うこと。

(1) 線①「これ」とはどういうことですか。「他者の視点」という言葉を使って書きなさい。

(2) **A** にあてはまる言葉を文章中から漢字二字でぬき出して書きなさい。

(3) 線②「自己物語」を言いかえている部分を——線②より前の部分から七字でぬき出して書きなさい。

- (4) **B・C** にあてはまる接続語を次のア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア だから イ つまり ウ ところで エ しかし オ また

- (5) **D** にあてはまる言葉として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 積極 イ 合理 ウ 保守 エ 知性

- (6) **E** に漢字二字をあてはめて、「気持ちがあってなかよくなること」という意味の四字熟語を完成させなさい。

- (7) 線③「慣れ親しんだ人たちの中にいながら、生まれ変わるといのは難しい」のはなぜですか。最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自己物語というのは身近な人によって形成されたものであるため、それを自分自身で勝手に変えることは絶対に不可能だから。
イ これまでの自分を知っている人には、これまでの自分の生き方を基準にした語り方をしないと相手の心の中に収まらないから。
ウ これまでの自分を知っている人たちに囲まれていることに安心し、生まれ変わりたいという気持ちがなかなか起きないから。
エ 新たな自分が今までと同じように相手に受け入れてもらえるかどうかかわからないため、そんなに簡単にはふみ出せないから。

- (8) 線④「そんな思い」とは、どんな思いですか。「非日常」「自分を知らない人」という言葉を必ず使って書きなさい。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

翌朝、母はいつになく上機嫌で朝食の用意をしていた。徹夜仕事をした母の目は脹れぼたく赤かった。

「修、約束のユニフォームだよ」

母はにこやかに笑いながら、手にした黒い布地の物を拡げた。修は目を剥いた。母の手には真っ黒な色の野球のユニフォームが吊されていた。

修は目を何度もこすった。たしかに夢にまで見たユニフォームだった。ただし白地の布で作ったものではなく、黒地に白の線が入ったユニフォームだった。

「気に入ったかい？」

「う、うん」修はうなずいた。欲しかったのは白地のユニフォームだが、ユニフォームに変わりはない。

「爺ちゃんの紋付を仕立て直して作ったんだよ。母さんの裁縫の腕もまんざらじゃないね」

「いいな、修」後から起きて来た勉がにやにや笑いながらいった。「母さんが作ってくれたユニフォームだから、世界で一つしかないぞ。それを着るときっと修も野球が上手くなるよ」

A

修はランニングにパンツ姿になり、早速、黒のユニフォームを着こんだ。身にぴったりしたユニフォームだった。胸には白い布地を切り抜いて作ったGのマークが縫いつけてあった。

「うん、似合う、似合う、修坊」

勉は笑いながら言った。母もおかしそうに目を細めながらうなずいた。修は母の鏡台の前に立った。鏡に映る自分の姿は、たしかに似合っていた。だんだん自分でも気に入りはじめていた。

B

修はユニフォームの背中に付いた白い紋を見付けた。母は笑いを噛み殺した。

「だからいったでしょ。紋付をつぶして作ったから、どうしても背中に紋がついているのよ」

「いいじゃないか、修坊。背番号の代わりだと思えば」勉はにやにやしながら修の肩を叩いた。

C

「うん、ドンマイ、ドンマイ」

母は目に涙を溜めて笑っていた。修は学校に黒のユニフォームを着て行った時の、みんなが驚く顔を想像していた。

黒のユニフォームを着た修は、教室に入るとたちまちみんなの人気者になった。男の子たちは、修の周りに集まり、さまざまな批評や感想を加えたが、修は気にならなかった。いち早く修の姿を見た広瀬先生が、母の作ったユニフォームと知って誉めてくれたからだ。女の子たちが自分のことを囁き合っているのも快かった。廊下ですれ違う上級生や先生たちも、みんな修を振り返り、何かと声をかける。修は得意満面だった。

午後の体操の時間は学級対抗のソフトボール試合だった。修はその日も正選手の人数が足りなかったで、レフトについた。修はユニフォームを着た分、身がひきしまり、上手になった気がしたが、結果はさんざんだった。

その試合でレフトに飛んで来たフライは五球もあったが、いずれも修はボールを捕れなかった。バッターに立っても打てず、三振とピッチャーゴロのノーヒットに終わった。

バッターボックスに立つたびに相手側から「黒バッタ」「黒バッタ」の野次が飛び、上がってしまったせいもある。広瀬先生がにこや

かに励ましてくれたことだけが修には唯一の救いだった。

「ただいまッ」

ランドセルを上がり框に放り投げると、洗濯物を畳んでいた母が心配顔で修を迎えた。

「修、どうだった？ ユニフォーム」

「みんな、びっくりしてた。すごいって」

「よかった。馬鹿にされたんじゃないかと思って心配してたわ」

母は眉根を開いた。

「みんなにからかわれたら、母さんが出て行ってやるからね」

「そんなことなかったよ」

修は「D」とからかわれたことはいうまいと思った。折角、夜なべして母が作ってくれたユニフォームだ。

「みんな、いったよ。かっこいいって。母ちゃんにいつて、おれみたいな黒のユニフォーム作ってもらって」

「そうかい、そうかい。友だちはみんなそういつてたかい」

母は顔をくしゃくしゃにし、目を細めた。修は嘘をつくのが少し後ろめたかったが、喜んでくれればいいやと思うのだった。

「おれ、テッオのところへ、遊びに行ってくる」

「ああ、行つといで。遅くなんないうちに帰るんだよ」

母はにこにこしながら、修の黒いユニフォーム姿に見入っていた。嘘をついて居心地が悪かった。修は一目散に外に走り出た。

(森詠『オサムの朝』より)

注1 紋付……黒地に白く家紋を染めた着物。

注2 上がり框……玄関から一段高くなっているところ。

注3 眉根を開く……心配事がなく晴れやかになる。

(1) 線①「徹夜仕事」とは具体的に母が何をしたことですか。文章中の言葉を使って書きなさい。

(2) 線②「修は目を剥いた」とありますが、これは「修」のどのような気持ちを表していますか。最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 悲しみ イ 疑問 ウ 不満 エ 驚き

(3) A C にあてはまる言葉として最も適切なものを、次のア～ウからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア これは何だ？ イ ドンマイ、ドンマイ ウ さ、着て、着て

(4) 線③「男の子たちは、修の周りに集まり、さまざまな批評や感想を加えたが、修は気にならなかった」とありますが、「修」が気にならなかった理由が書かれている部分を、文章中から三十字以内でぬき出して書きなさい。(句読点も一字にふくむ)

(5) 線④「洗濯物を畳んでいた母が心配顔で修を迎えた」とありますが、なぜですか。「くから。」があとに続くように、文章中から二十一字でぬき出して書きなさい。

(6) D にあてはまる言葉を文章中からぬき出して書きなさい。

(7) 線⑤「修は嘘をつくのが少し後ろめたかった」について、次の問いに答えなさい。

① 「修」のついた嘘とはどのようなものか。説明しなさい。

② 「修」が後ろめたい気持ちになりながらも嘘をついたのはなぜですか。最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

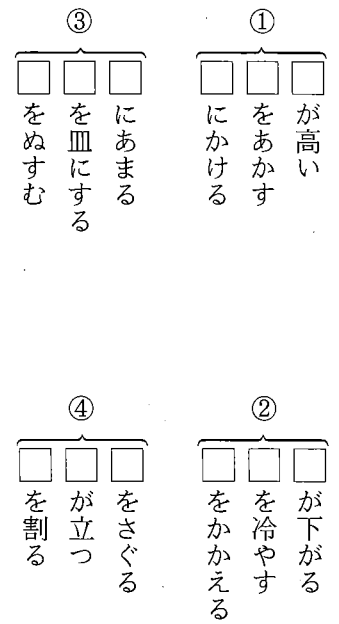
ア みんなにユニフォームをからかわれたことが恥ずかしかったから。

イ 試合の結果がさんざんだったことを知られなくなかったから。

ウ 自分のために徹夜でがんばってくれた母を喜ばせたかったから。

エ 一刻もはやくテッオのところへ遊びに行きたかったから。

三 次の慣用句の□に共通してあてはまる漢字一字を書きなさい。



四 次の①～⑥の熟語の組み立てをあとのア～カからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① 高校 ② 満足 ③ 公立 ④ 作文 ⑤ 進退 ⑥ 曲線

ア 主語と述語の関係になっているもの。
イ 上の字が下の字を修しよくするもの。
ウ 上の字が動作、下の字がその目的や対象になっているもの。
エ 似た意味の字を重ねたもの。
オ 反対の意味の字を重ねたもの。
カ 長い語を短く縮めたもの。

五 次の各組が類義語になるように、□にあてはまる漢字一字を書きなさい。

- ① 短所 || □ 点
② 賛成 || □ 意
③ 方法 || □ 段
④ 値段 || □ 格

六 次の各文の——線部を漢字で書きなさい。

- ① 先生や目上の人をウヤマウ。
② 家族となかくくらす。
③ 駅までの道をアヤマる。
④ 議案のサイケツをとる。
⑤ 絵のテンラン会に行く。
⑥ 仕事の効率をカイゼンする。

受験
番号

—							
(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
				B			
		C					

[illegible]

①	
②	
③	
④	

四	①		②		③		④		⑤		⑥	
---	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--

⑤	①	
	②	
	③	
	④	

六	
④	①
・	う
⑤	②
	らす
⑥	③
	る